

本論は、18世紀後半より19世紀半ばにいたる、シャム(タイ)王国の対中国外交姿勢について考察したものである。タイは、欧米の植民地にならなかった唯一の東南アジアの国家である。独立の維持は、そのすぐれた国際的開放性、巧みな外交手腕、いち早い近代国家形成など、ラーマ4世以来の王室の独特な現実的な政策展開に帰せられることが多い。その国際的開放性は、17世紀の「交易の時代」以降、アユタヤ、トンブリ、ラタナコーシン三王朝が、対外交易をその王権の経済的基礎としたことに帰因する。18世紀後半以降、王室の対外交易の中心は中国とのジャンク交易に移行する。シャムはこの時期から19世紀半ばまで、中華帝国の朝貢圏の中でのきわめて重要な一国であり続けた。朝貢国家としてのシャムが、このシステムの中から多大な経済的利益を受けたことは、多くの先行研究が述べているところである。しかし、従来の研究は、年代記中の記述など、わずかな漢文資料に依拠するのみであった。この結果、シャム王室が意識的主体的に、その経済的利益のために中華帝国の秩序に内包されたことのみが強調された。

本論は、著者によって発掘された多数の未公刊資料を含む、未利用のタイ語文献、中国語文献の膨大な収集とその精密な分析によって、シャム側の対中交易観を整理しなおし、シャムの巧緻といわれる外交手腕が実は、中華秩序の政治性に対するシャム王室の「無関心」に帰因することをみだし、シャムには中華帝国朝貢圏に参加した意識がなく、したがって自らの外交を従属外交とはみなしていなかったことを論証した。

豊富な資料に依拠した巧みな論証作業は無数に存在する。なかでも、第1章における、トンブリ朝のタークシンが在シャム湾華人集団を利用し、あるいはその集団の利益のために、アユタヤ期の対中関係を継承しようとして、さかんに遣使を繰り返す過程、また、その志向にもかかわらず、タークシンのタイ語国書は、両国を対等関係ととらえ、朝貢関係の中では不遜としかいいようのない言辞が用いられていること、さらにそれが中国語国書の中では、きわめて従属的な修辞に置き換えられていることなどの発見、さらに、開明的とされ、朝貢という対中従属外交を放擲し、自由貿易を展開した最初の国王とされるラーマ4世も、即位の当初においては、前代と同じく、朝貢使節を派遣してなんの疑義ももたなかったことの指摘は、著者以前にはこれまでまったく試みられなかった方法の結果である。

以上のように、本論の価値はなによりも、タイ語と中国語の膨大な第一次資料を分析比較する方法の多用である。この方法がもたらす豊富な生産性は、今後、タイ史、東南アジア史の新しい展開を生み出す。さらに、意識的あるいは無意識的な「無関心」さを基調とする前近代タイ外交の特質の指摘である。これは両国のナショナリズム的な史観からは到達しようもなく、また合理的な政治論からでは、経済性志向としてしか評価されえなかった地平である。以上の方法と論点から、これまで平面的にしか捉えられなかった朝貢外交論に、それぞれの地域性の観点を加え、大きく立体的に発展させた論といえよう。

本論は全文英語で執筆されたものであり、その結果、表現にやや不十分な点があり、また膨大な資料の分析にとらわれた結果、論理がまま不透明になるという若干の問題があるが、これは十分に修正可能である。本審査委員会は、本論文が博士(文学)の学位を授与するにふさわしい水準に達していると判断する。